

シリーズ『作らずにはいられない』(31)

ラジオ体操と餅つき大会

わたしは餅つきがやりたかった。無性に。

子どものころから、実家の自宅には、臼(うす)と杵(きね)があり、年末には家族で餅つきを行うのが年中行事の一つだった。

枚方に住むようになってからは、マンションの子ども会や、子どもたちが通う保育所・留守家庭児童会などで毎年のように餅つきをやっていた。

しかし、子どもたちが大きくなり、マンションの住人も高齢化し、子ども会も消滅して、だんだんそんな習慣もなくなってしまった。

もう1家族でやるには体力的にもちょっとしんどい。でもわたしは餅つきがしたい。

どういう巡りあわせか、娘夫婦が同じマンション内に住むようになり、孫たちが産まれた。たまたまなのか、世代交代の周期なのか、今年小学生になった孫の同級生が、マンション内に5人も住んでいた。これまでは小学生全体でも数人しかいなかったらしいのに。

そして、登校ルートの途中で京阪電車の「開かずの踏切」もあるので、孫が心配なじいじのわたしは、集団登校の付き添いを勝手にするようになった。

子どもたちが多いとイベント事もできそうな気がして、夏休みには、朝のラジオ体操を復活させた。ラジオ体操と言えば参加カードにハンコだと、昭和な発想で参加カードを作り、いろんなシールを貼ることにした。

何人来るのか、だれも来ないのではないかと不安だったけれど、新1年生はほとんど参加してくれて、近所の子や、マンションの高齢者も何人が集まり、子どもたちは朝からテンション高く走り回っていた。シールを毎日貼って集めるだけでも子どもたちは楽しんでくれた。結果、いろいろな世代で顔見知りも増えた。

最初の一週間だけの予定が、好評につき、夏休み最終週にも実施できた。

子どもらの親たちも親しくなって、自分たちでハロウィンパーティーを企画して、マンション内の集会室で楽しむことができた。クリスマスパーティーもやる予定らしい。

これなら、餅つき大会もできそうな気がしてきた。餅つきなら、昔取った杵柄というやつで、人生の先輩方の力も必要になる。力持ちのお父さん世代も必要だ。わたしの餅つき欲も満たされる。試みてみよう。

(LIP編集部 わたなべ)



- ◆ 作らずにはいられない (31)
- ◆ 【鉄道+御朱印】=[鉄印] ~鉄印旅は、楽しいよ⑩♥~
- ◆ パレスチナ モハマド・アローシュさん
「子ども達を大切にすることが、未来につながる」
- ◆ 関西訴訟結審前 九州訴訟判決前 合同集会の報告
- ◆ 原発賠償ひょうご訴訟控訴審第1回期日傍聴記
- ◆ 今月の五行歌
- ◆ なんちゃって農業女子(51)
- ◆ エッセイ 「母と認知症」 ◆ イベント紹介/会計報告

「LIP編集部」

<https://love-dugong.net/lip/>

連絡先

メールアドレス: lip@love-dugong.net

TEL: 070-5653-6913 (18時以降)



【鉄道+御朱印】=[鉄印] ~鉄印旅は、楽しいよ⑪❤~

~若桜鉄道~2025.4.20~

【若桜鉄道】若桜鉄道は、鳥取県東部に位置する八頭町（やずちょう）から若桜町（わかさちょう）を結ぶ営業キロ 19.2 キロの小さな鉄道です。

1987(昭和 62)年には第 3 セクター若桜鉄道株式会社に引き継がれ開業しました。

観光列車は、著名な工業デザイナー・水戸岡鋭治氏によるデザインで「昭和号」・「八頭号」・「若桜号」の3両が若桜線を走っています。車内は温もりのある木を可能な限り使うことで、人々を優しく迎え入れる心とむ空間が表現してあります。

若桜鉄道 ~2025.4.20~

若桜鉄道は、いわゆる「盲腸線」という、終点まで行ったらそこからは繋がってなくて、折り返すしかない鉄道です。片道 30 分と距離も短く、沿線に観光農園や、バイク乗りの聖地である(らしい?) 隼駅などありますが、この辺りの人は基本車なので、観光として乗って貰いたいというところに力を入れた鉄道です。

なので車両は観光仕様で、列車に乗ることが楽しい作りになっています。また駅舎は昭和レトロで登録有形文化財に指定されているところもあり、寅さんのロケでも使われたこともあるそうです。

終点の駅舎はミニ鉄道博物館仕様で、蒸気機関車の展示もあります。駅ナカにはカフェになっている場所もあり、名物「若桜バーガー」は、ここまで来たら食べなくては、という気持ちにさせてくれる手作りバーガーでした。ちょうどこれを食べてたら折り返す感じですし、テイクアウトにして、帰りの電車の中で食べるのもいい感じです。



私たちが「電車でおやつに」と食べたのですが、結構大きいので、おやつに食べたら晩御飯までにお腹を減らすのは大変なボリュームなのは嬉しい誤算。味もとても美味しい、地元のお肉を使ったハンバーガーなので、ここに来たら必ず食べましょう。

鉄印はこちらの若桜駅でのみ購入できます。「終点まで乗ってね」という若桜鉄道のお願いのようですね。途中下車しなくても買ってみたいくなるフリー切符はおしゃれで、もちろんお持ち帰りしました。

沿線は桜もたくさん植えられていて、桜の季節は綺麗なようですが、緑も綺麗な景色です。この日は、桜には少し遅かったのですが山桜は見頃で、山のそばでは綺麗な桜も見えました。

郡家駅に戻って JR に 2 駅乗ると、5 本指あしぶくろの製造・販売をしている「岸田工房」があります。あしぶくろ仕入れをして、おじさんと話をしていたら、近所の方が山菜を取ってきたそうで、「持って帰り～」と見ず知らずの私たちにも分けてくれました。いろんな山菜が軽トラいっぱい載っていて、昼ご飯を食べた「みたき園」で使われるそうです。飲食店がひとつあると、そこに関わるかたの雇用も生まれるんだなーと発見したのは、お土産の山菜と合わせてのおまけでした。

(たなべみか)

パレスチナからモハمد・アローシュさんが緊急来日 「子ども達を大切にすることが、未来につながる」

11月13日～16日、戦火のパレスチナから、モハمد・アローシュさんを迎えて、広島、神奈川、大阪で、「止めよう ガザ虐殺！ ZENKO パレスチナ連帯ツアー」が開催、集会が開かれた。アローシュさんは、PWSU（パレスチナ労働者闘争ユニオン）委員長、PPSF（パレスチナ人民闘争戦線）として、イスラエル軍によるガザ・パレスチナへの虐殺、包囲、住民追い出しに反対し、非暴力で市民レジスタンスの闘いを仲間たちと共に進めている。

16日（日）大阪市城東区のクレオ大阪東で行われた集会にわたしは参加、アローシュさんの言葉に強い感銘を受けた。パレスチナから危険を冒し来日してくれた、アローシュさんの言葉と思いをここに伝えたい。

* * * * *

「私たちの世代より、苦しんでいる子どもたちが平和に生きる未来を何より大切にしたい。武力でない抵抗運動で平和をつくるのがもっともふさわしい」とアローシュさん。時折涙ぐみ話される姿に胸が熱くなり、ガザの様子がリアルに伝わって来た。

パレスチナとは？ ガザ、ヨルダン川西岸とは？

パレスチナは、ガザとヨルダン川西岸に分けられているが、彼の住むトゥルカレムは西岸地区にあり、イスラエルの国境と接している人口約30万人の町。2002年にイスラエルが分離壁をつくり、自由な往来を奪った。

農業地帯だったが、耕地はイスラエルの入植地にされてしまった。2つの難民キャンプが破壊され、4万人の人びとが再び難民となった。イスラエルはすべての病院を閉鎖し、救急車を銃撃する。住民から医療を奪っている。

ガザの200万人の生活は困難を極め、ほとんどがテント生活。冬季の雨で水びたしになっている。爆撃での死者は7万人と報じられるが、実際は20万人にのぼると思われ、生き残った人は食糧がなく死にそうになっている。イスラエルは、無抵抗の市民全員を敵としているためだ。

日本でアローシュさんが感じたこと

毎日爆弾におびえているガザの子どもたちの現実がある。広島の平和公園で、日本の子どもたちの笑う姿を見てみて「子どもたちを本当に腹の底から大声で笑わすことのできる人がいたら、その人に私の人生の半分を捧げてほしい」とアローシュさんは思ったという。

横浜の海を見て、自分が子どもの頃は、「海」が身近だった。今は分離壁で子ども達は、このきれいな海を知らない。改めて海側も壁で囲まれた「天井なき監獄」といわれる非人間的な現状に唖然とした。

この9月の停戦合意では、雨のような砲弾を止めるため、命を守るため停戦合意を受け入れた。同時にアローシュさんは、「イスラエルは、停戦する気はなく、アメリカはガザで投資プロジェクト、投資マーケットを動かすことが目的。ガザの海の天然ガスもねらっている。停戦合意は、あまりにも遅く、公平でない。停戦はガザのみで西岸は入っていない。国連も、公平でない。いくつかの決議をアメリカは反対した。米軍の配備も進んでいる……」と、その暴力的狙いを見抜きながらも、「再建は何年もかかる。行方不明50万人が瓦礫の下にいる。国際社会、世界は黙っている。多くの人の行動は義務である。ガザのことは世界中に起こる」と話した。

わたしにできること、みんなにできること

わたしは、この残虐な行為に対し、何年かけても、パレスチナ人のための再建を支援する国際社会にしていかなば、との思いが沸いてきた。

集会の冒頭にアローシュさんの息子さん(13歳)とオンラインでつながった。

「今日は、パレスチナの子ども達の代表として話します。将来の夢を学校のノートに書くはずが、現在は、難民キャンプにいる。だが何が起こっても、子ども達はあきらめない。明るい未来を望んでいます」とのメッセージに、会場には共感の涙が広がった。

「子どもに関する機関も責任がある。声明ではなく実際の行動を！」というアローシュさんの言葉は強烈に心に残り、帰宅した。

文) 市民の広場「ひこばえ」 大田幸世

クリスマスイブの結審、判決に向かって……！

関西訴訟結審前 九州訴訟判決前 合同集会の報告

11月3日(祝・月)大阪市中央区のエル・おおさかで、原発賠償関西訴訟結審前・九州訴訟判決前合同集会が開催、福岡のカトリック大名町教会会場とオンラインでつないで、活発な交流が行われました。

関西訴訟 — 大阪地裁で56回の期日を終え
12月24日結審

原発賠償関西訴訟は、東京電力福島第一原発事故で関西に避難してきた人達による、国と東京電力に対する損害賠償請求訴訟です。2013年9月に27世帯80名が提訴、その後第2次～第4次提訴がなされ、現在原告の数は79世帯222名。2014年9月に第1回期日が開かれ、2023年5月から18回にわたって続けられた原告本人尋問も今年9月11日の第56回期日で終了、12月24日に結審を迎えます。

結審を前に開かれたこの日の集会では、最初に、弁護団から2つのプレゼンテーション。まず、「避難の相当性について」。強制避難区域から外れた地域からの避難者は「自主避難」とされ、「政府から危険と言われてないのに、なんで避難したん？」と非難を浴びせられたりします。でも、本当に危険ではないのでしょうか？ 原発事故前の法規としては、1957年に制定された放射性同位元素等による放射線障害の防止に関する法律と、炉規法(核原料物質、核燃料物質及び原子炉の規制に関する法律)があり、その後ICRP(国際放射線防護委員会)の勧告により、「年間1ミリシーベルト(mSv)」が一般の人々が受ける放射線の安全な線量限度とされています。しかし事故後、「年間20mSvを下回った地域において危険だという証拠はない」として、1mSvを超える地域からの避難の相当性を政府は否定しています。で、ここで疑問。「まずまず大丈夫」のラインがいきなり20倍も後退した……。知識として私も聞いて知っていたのですが、でもよく考えると、人間の身体が急に放射能に対して強くなったわけでもないのに、変。てか、……恐すぎる。でも、そんなことを私たちはちゃんと知ってる？ 意識してる？ 苦い思いをかみしめながら、続いて、類似訴訟に対する2022年6月17日の最高裁の判決の問題点について、お話を聞きました。

プレゼンの後6人の原告が前に立ち、被害の訴えを語りました。美しい風土と気心の知れた隣人たちとのあたたかい地域の交流、それが突然奪われ、健康被害と未来への不安を抱えながらなじみのない土地で暮らした十

余年。一人ひとりの原告の言葉が胸に迫ります。その後の記者会見では、各新聞社やテレビの記者から、次々質問があがりました。

福島原発事故被害救済九州訴訟 第一陣 控訴審
— 福岡高裁で、12月24日判決言い渡し
……の予定でしたが、その後延期されました

短い休憩の後は、九州訴訟のお話です。福島原発事故被害救済九州訴訟は、原発事故によって避難を余儀なくされた原告らが、国と東京電力に対して損害賠償を求めて2014年9月福岡地裁に提訴、2020年6月24日第1審判決。(*)国の責任を否定し、救済の範囲・程度も極めて不十分・限定的なものに留まった内容であったことから、控訴審に訴え、福岡高裁で10回の期日の後5月22日結審、12月24日に判決が言い渡されることになりました。(合同集会の後、判決は2月4日に延期と決定)九州訴訟では、避難元が福島県内か県外か、あるいは、避難元の線量が高かったかどうか等によって原告資格を区別せず、原発事故によって等質的な被害を受けたものとしてすべての避難者の権利回復を目指しているということ。まずそんな説明を、九州から駆けつけてくれた、同訴訟共同代表の金本友孝さんから聞きました。原発事故当時福島県いわき市で牧師を務めていた金本さん。事故直後「苦しまずに死ぬるよう、祈りなさい」と3人の子どもに言ったそうです。「でも、そんなになる前に逃げた」。「誰かから水をかけられそうになったら、誰だって逃げるでしょ。放射性物質をばらまかれたら逃げる、当たり前のこと。それを、故なく避難したと言われるなんて……」。金本さんがつくづく感じたのは、「この国って、国民をまもる気持ちがさらさらないんだなあ」ということ。

続いてZoomで九州会場から語ってくれたのは、事故当時14歳だった金本さんの次男、暁(あつき)さん。今年2月の第10回口頭弁論では、証言台に立ち、地震と原発事故、九州に避難してきたからの日々の葛藤を語りました。中2になる前の春休み、一家で九州に避難、その後も福島には戻らないと突然親から告げられた。え、なぜ？ 同じ吹奏楽の部活の友人たちは、そのまま元の生活を続けているのに……。「おとなになって振り返ると、親はどれだけ危ないかということを感じ、決断してくれたのだと」。今は父親と共に、訴訟の共同代表を務めています。

九州会場のお話に対する記者からの質問の後には、京都、ひょうご、愛知の訴訟の控訴人や支援者からの応援アピール。安心の未来に向かって、諦めない、ひるまない！ 3時間半の合同集会は熱いこころのままに終わ

りました。

(*) 2021年9月には同様の訴訟を追加提訴（第二次）し、福岡地裁で審理が係属しています。

(文／豊高明枝)

原発賠償ひょうご訴訟控訴審第1回期日傍聴記

東京電力福島第一原発事故で福島、宮城両県から兵庫県に避難した30世帯78人の住民が国と東京電力（以下、東電）に賠償を求めて争っていた原発賠償ひょうご訴訟は、2024年3月21日神戸地裁で、国の責任を認めず、東電にのみ22世帯50人へ総額約2400万円の賠償支払いを命じる判決を言い渡されました。これに対して、同年4月2日15世帯39人が大阪高等裁判所（以下、大阪高裁）に控訴、10月20日（月）大阪高裁にて控訴審第1回期日が行われました。

午後2時半からの開廷を前に、12時30分から裁判所正門前の公園で事前集会在開催。その後集まった人々は入廷行進を見守った後裁判所に入り、大法廷での傍聴に列を作りました。この日傍聴券の抽選は行われませんでした。80席の傍聴席はほぼ満席。原告被告双方の提出書類の確認の後、原告意見陳述が行われました。

最初に陳述を行ったのは、男性の控訴人Aさん。事故発生後小学生になった孫が頻りに鼻血を出すようになり、家族にも甲状腺異常が見つかり、ここには危ないと家業をたたみ、それまで生きてきたこと全てを捨てる決断で避難してきた、健康被害は今も続いている、それなのに「ウソをついている」と糾弾されたり、私たちは被害者であるのに、いつの間にか歪曲され、国と東電を訴える加害者扱いされていると述べ、「私と家族が安全に安心して生活できる日が来ることを真に願います」と陳述をしめくりました。

続いて陳述したのは、20代後半の女性。事故当時小学5年生でした。新学期が始まる前に突然仲よしの友人が引っ越し。理由は「放射能が危ないから」。学校では、夏になっても長袖長ズボン、マスクと帽子着用、外での体育はなし。秋頃から外での体育が始まりますが、被ばくを気にする家庭の子と、そうでない子や先生との間で、「意識の差」による溝が大きくなっていきます。その後中学2年の夏兵庫県に母子避難しましたが、それをきっかけに両親は離婚。避難後それまで続いていた体調不良は回復しましたが、転校した学校で環境の違いに悩まされ、心ない言葉にも傷ついて、不登校も経験。故郷で家庭菜園を続けていた祖父は5年前急性白血病で血を吐いて亡くなりました。「震災を通して、私は世の中の冷



たさを学びました。客観的なエビデンスがなければ、どれだけ助けを求めても助けてもらえないことを学びました」「私のような思いをする子どもたちが今後出ないように、どうか、これからの日本の子どもたち、未来に希望をください」。切々と語られる言葉が胸に突き刺さり、傍聴席で涙ぐむひとたちも。(*)

続いて、津久井弁護士団長の意見陳述のあと、責任論と、避難の相当性、控訴人らの被った損害について、4人の弁護士がプレゼンを行い、一審判決にみられる様々な間違いについて指摘を行いました。損害についての弁論のなかでは、一審判決の不当性を論じた上で、「一審原告の約半数の世帯が控訴を断念せざるを得なかったが、これは原判決に納得したからでは決してなく、国にも東電にも裏切られ見放された上に、人権の砦たる司法からも見放されたことに対する絶望によるものです」と語られたのが特に印象的でした。

15時30分、次回期日は2026年2月2日（月）午後2時30分からと告げられて、閉廷。その後中之島図書館別館で報告集会が開かれました。

(*) 控訴人2人の意見陳述については、春橋哲史さんのブログに全文紹介されています。

<https://haruhasi.jugem.jp/?eid=174>

(文・豊高明枝／写真・堀越善孝)

ＬＩＰが選ぶ

今月の五行歌

まゆみ

駅伝の季節だ
もと陸上部の
夫が

夫が

テンション マックスになる

冬が近い

粘り強いねと

褒められる

手際が悪い

諦めが悪い

だけなのにな

なんでもない日

ケーキを3個

買ってしまった

何事もないしあわせ

おめでどう

浮游

宮滝菜摘

五行歌(ごぎょうか)とは、五行で書く短い詩。字数や季語などの制限はなく、普段使う言葉で、日々の思いを綴ります。枚方では、ひらかた五行歌会が、8月を除き月一度開催。10月から、メールで歌会も始めました。

(連絡先: akkie.toyotaka@gmail.com)

または 090-5893-5635・豊高)

No.51

なんちゃって農業女子(笑)

今回は「イベント」のご案内ネタです。

今年も、京都府久御山イオンモールにて、12月6日 AM10時～PM5時の予定で、農福連携(農業と福祉の連携事業)の「福菜市」があります。私は今年で3年目の参加で、一昨年行った「クリスマスリース作りのワークショップ」が大盛況で、去年も引き続き担当させて頂き写真①は、昨年作ったリースです。

これは「さつま芋の弦」をリングにして、色々な飾り(基本的には自然素材の物)で飾り付けてもらうというワークショップです。弦ボケと言って弦ばかりが育ちすぎた感じのさつま芋でも、リースの素材にはうってつけでありまして、利用者様と一緒に今年も30個のリングを作り、写真②の様な飾りも作りました。「どんぐり」や「松ぼっくり」などに爪楊枝を刺して、リングに装着しやすいようにたくさん準備を行いました。綿花の殻にも金銀やパステル赤・青などクリスマスカラーに色塗りしたり……。準備は大変ですが毎年たくさんのお子様達や親子連れにリース作り体験をして頂いてますよ。「世界に一つだけのクリスマスリース」を皆さんも手作りしに、京都府久御山のイオンモールの「福菜市」に来てみませんか？

もちろん「農福連携」のイベントですので野菜の販売も行っております。私の職場からは写真③の「紅はるか」をはじめ、紫芋、人参、小松菜・水菜・ラディッシュなどを販売予定です。紫芋は、なかなかスーパーには並ばないので、食べ方もお伝えすると共に、「試食」もご用意致

します(笑)

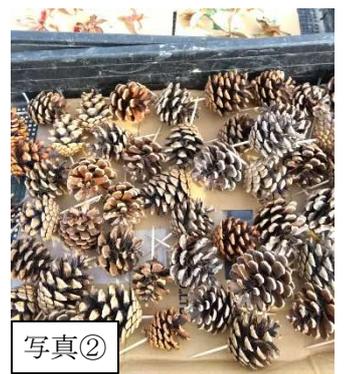
また、今年も8月号でご報告した「赤しそのシロップ」も商品化されましたので販売できることになりました。ご購入頂いた方には「ホット」で赤しそジュースのご試飲もしていただけるように準備しております。

今年の暑い暑い夏を乗り越えた「赤しそ」と「さつま芋」ぜひ、手に取って口にして下さい。では、会場でお待ちしてま〜す。

文・写真／へそくん



写真①



写真②



写真③

母と認知症

泉水

私は六月十七日から二週間、札幌の実家に帰った。姉の手伝いをするためだ。難病にかかり、要介護4になった九十一歳の母の世話を、姉はしてくれている。

母がデイサービスに行っている間に、姉は用事や自分のことをする。でも認知症の母と二人の時でも、外出をしなければいけない時はある。用事と所要時間を言い、メモも書いて行く。ところがそういう時に限って、普段できないことができてしまう。ある時など、二重鍵の玄関扉を開け、エレベーターで下りて外に出ようとして、管理人さんに保護された。厳寒期の北海道でコートも着ず、サンダル履きだったそう。危うく徘徊して行方不明になるところだった。

初期症状で困ったのは、トイレの失敗が増えたことだった。居間の扉を開けてすぐのトイレの場所がわからなくなり、洗面所や姉の部屋に行って失敗する。姉は「ここがトイレ」や「洗面所」などと扉に張り紙をした。今でも字はちゃんと読める。蓋を開けずに座って失敗した時もある。その度に洗濯と掃除だ。そこで今度は、蓋が閉まらないようにテープで貼り付け、トイレの使い方の絵を描いて横に置いた。でもこれは、一人で歩いてトイレに行く意思があった頃の話だ。

現在は紙パンツをつけ、歩行器で行く。羞恥心も弱まり、悲しいが介護はやりやすくなった。太い支え棒を挿んでいる間に、こちらが手伝う。しかし「座って」と促しても怖がって座れない時もあり、ひと苦労だ。考えてみると、便器に座れることを理解できているから、後ろ向きに座れるのだ。さっき見た便器の記憶がすでにない人にとって、空間に座れと言われているようで怖いのかも。しれない。

介護をしていると、トイレもそうだが、日常の何気ない動作は、小さいステップを積み重ねた上にできる複雑なものだと気づく。一つ一つの段階を子供は学習してできるようになり、年を取ると一つずつ忘れていく。

料理や編み物も手順がわからなくなり、やめてしまった。それでも私達が調理していると、テーブルの箸や皿を動かすので、「きっと自分もやるうとしてるんだね」と姉と話す。「どうしてそんなことをするの」とはもう言わない。

私と姉が話していると、必ず母も会話に加わる。話の内容は筋が通っていないので相手をしているのと疲れてくる。普通の会話ができただ頃が懐かしい。

母は、大人しい性格だったからか、人の気分が悪くなるようなことは言わない。認知症でよく聞く、怒りっぽかったり、物を「盗んだ」と疑ったりということも今のところない。いつの、どこの、誰との経験かさえ、ごちゃ混ぜな話でも、何か話しているだけマシなのかもしれない。

テレビを見て、姉がランプ氏と関税を非難すると、母はダメダメと注意する。

「悪口はやめなさい、聞こえるよ」

またテレビに小さい子が出ると喜ぶ。特に孫が男のせいだ男児が好きだ。その時は、ガザ地区の飢えた男の子が、親の腕の中で震えて泣いていた画像だった。

「かわいいねえ」と母は嬉しそう。背後にある事情はもう理解できない。

時々、私のこともわからなくなる。誰だろうという顔をされると悲しかったが、仕方がないことだと諦めた。だが全てが分からない訳ではない。私の帰る日の話を聞いていたのか、翌日にポツンと言う。

「泉は、もう帰ってしまった」姉が「あっちにいるよ」と言うと、やっと台所にいる私に気づき、

笑顔になる。

唐突に意味深長な言葉も言う。半年前には、「困っていると、いつも誰かが助けてくれた。いい人生だった」と言っていた。

「おばあちゃんに会いたい。もう死にたい」と、今はつぶやく。身体がともしんどくて、死を意識しているのかもしれない。

食欲が減り、一日で茶碗に半膳がやっとになった。煮豆や卵料理などの好物を出すと、何とか食べる。朝、なかなか起き上がれない時が多くなった。医者は少しずつ衰えているだけと説明した。

介護施設の入所の順番はまだ先だ。その前に点滴が必要になるかもしれない。「入所や入院をする、もう自宅に戻っては来られないだろう」と姉は心配する。

でも母は、介護に手間はかかるが、マシな認知症の方だろうと思う。意味不明でも、全くマト外れでもないことを適当に話し、会話にさりげなく参加する、長年の主婦の会話術があるから孤独にならないようだ。私も怒りっぽいのを直し、笑顔で会話を楽しみ、マシな認知症になるならなう。

私見て おばさん来たと言ふ母も

我も老いたり 札幌の朝あした (泉水)

すでにもう 入所希望は出しつつも

待機よ続けと 願ひて豆まく (姉・節分に)

エッセイサークル「叢(くさむら)」の、筆名「泉水」さんの作品です。

「叢」は、ステーション・ヒル枚方五階の生涯学習交流センター・集会所にて、毎月第四水曜日に例会が開かれています。

年刊の作品集「叢」は枚方市立中央図書館に所蔵されています。

イベント・サークル・ボランティア情報

【参加者募集】 放課後クラブ「チャレンジ・キッズ」

身体ほぐしのフェルデンクライス体験レッスン

日時: 12月19日(金) 11時00分~12時30分

場所: ラポールひらかた 3階 和室

参加費: 1,500円(要予約)

持ち物: バスタオル、水分

問い合わせ・申込み先:

090-5893-5635 (豊高・18時以降)

c-k@love-dugong.net

主催: 放課後クラブ「チャレンジ・キッズ」

「心の病・予防対策講座」

心理学と脳科学から、心の健康法を学びます。

精神的不調な心の健康を日ごろから少し気にとめて、対策をしておくことで予防可能です。

◆日時: 12月23日(火) 10:00~11:30

◆会場: 交野市立「青年の家」研修室206

◆参加費: 500円(資料代含む)

◆定員: 15名

◆対象: 18歳以上

◆申込・問合せ先: NPO法人京阪総合カウンセリング

TEL 072-814-7140

メール jimu@npo-ksc.net

http://www.npo-ksc.net

みんなとっしょに高校へ行きたい=

知的障害者を普通高校へ北河内連絡会定例会ご案内

日時: 2025年12月6日(土曜) 午後1時45分~5時

場所: 四條畷市・岡山自治会東別館

JR学研駅前線忍ヶ丘駅下車、出口2から徒歩約7分

駐車場あり

- 内容: ① 高校受験を巡って
② 子ども達と学校や生活の課題、不登校を巡って
③ 「医療的ケア」の必要な子ども達を巡って
④ 高校卒業後の進路と生活、課題
⑤ その他、自由に交流します。

主催: 知的障害者を普通高校へ北河内連絡会

○ ZOOM参加希望の方は、松森(matumori@ocn.ne.jp)まで連絡をください。

連絡先: 松森: 090-1960-3469 関山: 090-2599-6162

ガザ・パレスチナ 歴史と現在 ~わたしたちの思い~

■日時 12月19日(金)~21日(日) 10時~15時

■会場 交野市青年の家1階展示ロビー

(京阪交野線「交野駅」出口2より徒歩4分)

■共催 オリーブの樹(京田辺シュタイナー学校有志)

交野・憲法とくらしを考える会

■参加費 無料

■連絡先 090 5368 8578 (西函)

「オリーブの樹」の展示では、中学3年生から高校3年生までのメンバー自身の言葉によるレポートを紹介し、ガザ・パレスチナで起きていること知り、わたしたちの思いを伝えたいと思います。

【枚方自閉症児(者)親の会 定例会】

自閉症だけでなく生きづらさを感じながら生きている人、その保護者や関係者の方々。どうぞフリートークでご参加ください。話すことにより、何か新しいことに気づけるかもしれません。

◆日時: 12月15日(月) 10:00~12:00

2026年1月19日(月) 10:00~12:00

◆場所: ラポールひらかた 4階共用ルーム

※連絡先 春名 072-397-0053 団 072-868-7359

応援ありがとうございます♪

LIP応援団

匿名希望さん(切手寄付)

LIP会計報告(前号以降)

金額(円)	内容
18,872	前号から繰り越し
2	銀行利息
▼3,872	12月号用紙
▼500	ロッカー代
▼1,240	11月号印刷代
13,272	計(次号へ繰り越し)

STOP WAR NOW LOVE & PEACE



◆LIPは市民が書き、市民が読む地域密着型情報紙です。あなたも紙面に登場してみませんか？

イラスト 表紙・裏表紙: 平井由恵



新しいジブン、見つけてみいへん？
枚方で仕事を探すなら！

ひらつー求人

ほぼ枚方市内と近くの求人だけ集めた
枚方つーしんの求人情報ページ

ひらつー 求人 🔍

WEBからアクセス ➡

